

1. たよりになるのは、おばあさん一人

高森町高森北小学校六年 M・T

あのおそろしい水害にあつてから、もう二年。災害であらされたり、なくされたりした田畑はいつのまにかふっきゅう工事で多くは完成した。でもぼくは、田沢川の大きな石などを見るたびに、いつもあのおそろしかった二年前の六月二十七日を思い出す。

二十四日ごろから、しとしととふり出した雨は、一日ましに、こう水量がふえていった。二十七日の日は、二時間か三時間で家へ帰った。田沢川の水は橋までつかんとばかりにゴーゴーとすごい音をたてて流れていた。

帰った時はおかあさんはいなく、おとうさんがいた。おとうさんと、それからおばあさんとで、かじゅえんにおいてある、はつどうきをもちにいった。その時は、おとなりのおばさんも、ひきにいった。

家に帰って、おかあさんが、おとうさんに、  
「水が多くなるでこいって。」

といいに来た。ぼくはこれが最後に見る父母の顔とは思ってもいなかった。そして出かけて、六時十五分ごろ、

「ドドン」

というすごい音とともに、上の方から、

「てつぼう水がきたぞう。」

といつて、かけおりにきた。

夜中ごろ、有線で水をふせぎにいつていた人たちで、ひなんしている人の名をいつていた。でも、おかあさんとおとうさんの名は、なんどきいても出てこなかった。

もうその時、死んだというかくにんはとてもこくなって、その次の日、おかあさんの死体が見つかったからは、ぼくのたよりになるのは、おばあさん一人だった。

その時から今までのくろうは、ひととわりではなかった。でもそれをなぐさめてくれたりするのは、近所の人達やばげましのてがみだった。

一生けんめいのこっている田畑をたがやしたりするが、なんでおばあさん一人の手で、いくら一生けんめいやったとて、どのくらいできよう。もしぼくももっと大きかったらと思う。このような、かなしい災害の記録を、だれもがわすれてしまいたい気持だ。

また災害にあつた日が来た。

大きくなつたらこういう人になりたい

ぼくは、先生から大きくなつたらどんな人になりたいかといつて、かいてきなさいといわれたので、かいてみた。

ぼくはこれから中学をそつぎようして、高校へ行きたいと思つている。高校といつてもいいところへ行きたいと思う。そして高校をそつぎようしたら、大

学へ行き、それからあと、どこかの会社へいきたいと思う。

でも、ぼくのゆめだ。

会社へ出たら、ぼくはだれになろうかな。

ぼくは機械ちようせつをする人になりたい。きかいというのは、とてもたのしいものだ。ギヤアとか、えんじんのおと。そして、その会社じゆうのいろいろのきかいを とめたりうごかしたりができる。とてもたのしく思う。そして もっともつときかいのことをたくさんべんきようして、せつけい技しになりた いと思っている。

ぼくは、大きくなったら今かいたような人になりたいと思う。 (三十八年)